博 士（文 学） 上 原 周 子

学 位 論 文 題 名

チベット族による民族間紛争の解決に関する人類学的研究

－中国青海省海東地区化隆回族自治県における事例から－

学位論文内容の要旨

本論文は、紛争や紛争解決に対するグローバルな視点を盛り込んだ近年の研究、たとえば法学や政治学における国際秩序の構築に関する議論や、メディアによる民族紛争の情報化における民族イメージへの固定化という研究に対し、人類学的視点からのローカルな紛争解決研究を提示するという立場をとる。つまり、土地固有の文脈に即して生きる人々による紛争解決の流儀を明らかにしようとするものである。そのため、直接観察、聞き取りというフィールドワークの手法を用い、中国青海省海東地区化隆回族自治県ジェンザ・ロンワ地域において、2005年7月から8月、2006年4月から7月、9月、2007年6月から8月、10月から12月、2008年3月の計10ヵ月間に渡る現地調査を行い、紛争と紛争解決の過程の記載を行なう。そして、これらのデータを基に、チベット族による民族間紛争の解決方法とその選択の背景に着目し、彼らの紛争解決の論理を分析、考察する。

本論文は全 4 章から構成される。第1章では従来の研究史を概観し、また研究の視点を定める上で参考となる文献を批判的に検討した。すなわち、紛争やその解決に関する研究の特徴を指摘し、同時に、各分野の欠点を他分野の研究が補完するように紛争および紛争解決の研究が全体として展開されてきたことを指摘した。とくに人類学では紛争および紛争解決そのものに着目した研究が希少であること、他の研究対象を分析する切り口として紛争というトピックが用いられてきたことを指摘した。さらに、研究の視点を定める文献の批判的検討から、社会を構成する人間関係、その関係性に付随する利害が紛争の解決方法の選択基準と関連することが指摘された。

これに基づき本論文では、民族間の関係性とそれに付随する利害に着目しながら、チベット族による民族間紛争の解決方法を分析し、その解決方法の選択の背景について考察し、チベット族による紛争解決の論理を明らかにすることを提示した。

第 2 章ではフィールドとなったジェンザ・ロンワという社会の特徴を明らかにした。まず、ジェンザ・ロンワの民族の歴史に基づき、元来、チベット族による12集落のみ存在していたのが、漢族や回族の移住、人口増加により現在では20集落に増加したことを述べた。また、現在の生業、学校教育、人口、民族構成、言語、集落組織、宗教活動などの生活の諸相について概説した。さらに、20集落のうち複数の民族によって構成される13集落の民族関係を概観した。以上から現在のジェンザ・ロンワという社会の特徴として、まず定住社会ではあるが、定期的に出稼ぎに出る人口も増加していることから、半定住半移動社会へと移行しつつあることを指摘した。さらに、国家としては漢族が多数派であるが、化隆回族自治県であるため県や鎮、郷といった地方政府のレベルでは回族が政治的に力を持ち、

集落のレベルでは各集落の民族構成や各民族の人口構成比率により、書記や村長が決定される。とくにチベット族に関しては、チベット族を含めた複数の民族で構成される 12 集落のうち、書記を務めるのが 4 集落、村長を務めるのが 2 集落であり、また人口的にチベット族が多数を占めるのは 3 集落となっている。生業はどの民族も農業を基本とするが、回族と漢族には商業を営むものもいる。また、漢族は自らの宗教活動に加え、チベット族の宗教活動にも参加することを通してチベット族との友好関係を形成していること、他方、回族は宗教活動を通してチベット族や漢族と友好関係を形成することができないことから、宗教活動を指標としてジェンザ・ロンワを構成する民族勢力が二分されていることを指摘した。

第 3 章では、チベット族と回族の紛争とその解決方法に関する 3 つの事例を提示した。第 1 はジェンザ・マニカンの祭におけるチベット族と回族との摩擦の事例から、ジェンザ・マニカンの祭に入場料の徴収という制度を導入することにより回族の侵入を回避するようになった経緯を明らかにした。第 2 は阴坡(インプー)村、尖巴昴(ジャンバノン)村、紅卡哇一(ホンカワ 1)村、紅卡哇二(ホンカワ 2)村の 4 集落における灌漑用水をめぐる紛争とその解決の事例から、集落間の関係や集落を超えて形成される親族関係や友人関係といった民族間の紐帯を壊さないように配慮しながら、解決方法が選択されていることを明らかにした。第 3 は紅卡哇一村内における紛争とその解決の事例を提示した。紅卡哇一村にはチベット族と回族、漢族が混住しており、これまでの紛争のなかでも農閑期におけるチベット族と回族の若者同士の飲酒をきかっけとした紛争が多発してきた。しかし、チベット族の若者に対する老人の説教やチベット族の伝統的な酒造りをやめることにより、近年では紛争が減少したことを明らかにした。また、紅卡哇一村では金銭や農作業用トラクター、畑の貸し借りといった民族間での協力関係が発達しており、チベット族の老人たちはそうした関係性の維持に配慮しながら、紛争の仲裁を行っていることが明らかになった。

第 4 章では前章で提示した事例間の共通点を検討し、そこからチベット族の紛争解決に関する論理を考察した。その結果、チベット族の紛争解決の流れが 2 段階あることが明らかになった。すなわち、第 1 段階では摩擦や紛争の予防や回避が行われ、そこから紛争に発展した場合には、第 2 段階として仲裁が行われることが指摘された。また、その紛争解決の流れは最初から存在したものではなく、過去に幾度かの摩擦や紛争を経ることで歴史的に整備されていったことが指摘された。さらに、それらの紛争解決は、現状の民族関係を維持するという方向性を持っており、それが紛争解決の目標となっていることが指摘された。そして、その方向が支持される背景には「争うと損」とする意識が存在することが指摘された。以上から、段階的な紛争解決の流れ、その流れを方向付ける「現状の民族関係を維持する」という目標、目標の背景にある「争うと損」という意識の連動が、チベット族による紛争解決の論理となっていることを明らかにした。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　煎　本　　孝

副　査　　教　授　　佐々木　　亨

副　査　　准教授　　結　城　雅　樹

学位論文題名

チベット族による民族間紛争の解決に関する人類学的研究

－中国青海省海東地区化隆回族自治県における事例から－

本論文は、紛争や紛争解決に対するグローバルな視点を盛り込んだ近年の研究、たとえば法学や政治学における国際秩序の構築に関する議論や、メディアによる民族紛争の情報化における民族イメージへの固定化という研究に対し、人類学的視点からのローカルな紛争解決研究を提示するという立場をとる。つまり、土地固有の文脈に即して生きる人々による紛争解決の流儀を明らかにしようとするものである。そのため、直接観察、聞き取りというフィールドワークの手法を用い、中国青海省海東地区化隆回族自治県ジェンザ・ロンワ地域において、2005年7月から8月、2006年4月から7月、9月、2007年6月から8月、10月から12月、2008年3月の計10ヵ月間に渡る現地調査を行い、紛争と紛争解決の過程の記載を行なう。そして、これらのデータを基に、チベット族による民族間紛争の解決方法とその選択の背景に着目し、彼らの紛争解決の論理を分析、考察する。

本論文は紛争と紛争解決に関する文化人類学的研究である。本論文の研究成果は、第1に従来ほとんど研究の行なわれていなかった中国青海省海東地区化隆回族自治県ジェンザ・ロンワ地域における、現地でのフィールドワークに基づいた詳細なチベット族、漢族、回族とその民族間関係の文化人類学的記載の提示にある。第2は紛争の解決方法はもとより、社会の特徴や社会を構成する人間関係、またその関係性に付随する利害に焦点をあてるという明確な分析視点のもとに、当該地域と人々の社会、経済、歴史的状況を丹念に描き出し、チベット族による紛争解決の論理という結論を導き出していることである。第3は、紛争と紛争解決の研究分野では、従来手薄であった土地固有の文化的文脈を重視した文化人類学的視点からの研究に挑戦し、さらに研究の現代社会への貢献に向けた姿勢を持っていることである。

もっとも、他地域との比較対照に基づく精緻な要因分析や、民族の移住をめぐる歴史的過程の検証など、さらに必要とされる点が残されている。しかし、これは、今後取り組むべき課題として期待されるものであり、本論文が示した学問的価値を損なうものではない。本論文の研究成果は当該研究領域の発展に大きく貢献するものであると評価することができる。

本委員会では、申請論文を慎重に審査し、口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員

一致で上原周子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。